

阿片戰爭

上卷 滄海編



愛

阿片戰爭

上卷 滄海編

陳舜臣

講談社

阿片戦争 上ノ滄海篇

五三〇円

著 者 陳舜臣

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二―二二二
〒一一二 振替 東京 三九三〇
電話東京(〇三三)九四五―一一二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社



第一刷発行 昭和四十六年十一月二十日
第四刷発行 昭和四十七年十一月十日

©陳舜臣 昭和四十六年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

Printed in Japan

目次

第一部

望潮山房主人

アマースト号

江蘇巡撫

正陽門外

断章 I

三昧火

広州

暗殺拳

東と西

阿片商人

年末点景

陷穽

165 148 136 117 106 94 83 69 49 34 22 7

地下牢

闇よさらば

第二部

蘇州水影

連家の兄弟

買弁

弛禁

舞弊

断章 II

逃げた女たち

嚴禁論

前ぶれの砲声

ガーデン

354 338 321 302 290 279 263 248 236 223 209 194 179

装幀 村山豊夫

さしえ 貝原六一

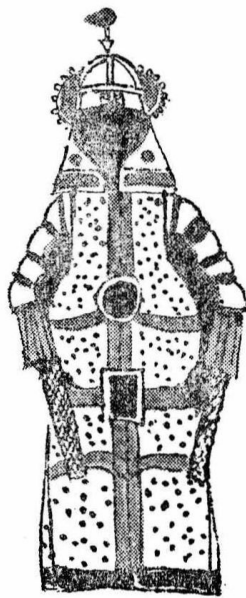
装幀使用の文字は、林文忠公
遺集のうち林文忠公政書（清
光緒年間林氏刊）より採字

阿片戰爭

上／滄海篇

第一部

陳化成^の着^た戦服



望潮山房主人

1

清の道光十二年（一八三二）三月二日は、太陽曆で四月二日にあたる。

距熱帯の福建省廈門の町は、朝からすでにきびしい日差しを浴びていた。

廈門は岩石の島である。島内の名勝、たとえば太極朱熹ゆかりの白鹿洞や大虚法師開基の南普陀寺など、いずれも奇岩怪石で名高い。

市城東郊に、一軒の豪壮な邸宅があったがその庭にも、いろんな形状の岩がちりばめられていた。

邸の正面に大門があり、二つの扁額がならんがかかっている。

鴻園
飛鯨書院

達筆とはいえなかった。なぐり書いたような文字は、むしろ悪筆というべきか。隅に、『定庵書』と署名されていた。

通りすがりの読書人が、その額を見上げて、よく首をかしげたものだ。

——この豪邸に、なんたる悪筆の門額。

その日の朝、通りかかった一台の轎の簾が門前で半ばひらかれ、眼尻のさがった初老の男の顔が邸を見上げた。

「成りあがり者め！」

唾を吐いて、男は荒々しく簾をおろした。

この邸は、厦門の豪商金順記公司主人連維材の別荘と家塾を兼ねたものである。丘の斜面に築かれているので、園内の諸建物は、積み重ねたようにみえた。

『飛鯨書院志』に、

山ニ依ッテ建ツ。ソノ形、筆架ノ如シ。

とある。

筆掛けのように段々状になっているのが、まるでこれみよがしに、その豪奢の全貌を誇っているかのようだった。

門にむかって左がわの一面が、飛鯨書院と名づけられた家塾で、残りぜんぶが連家の別墅である。

四進式書院で、前座に門樓、二座に文昌堂、三座に講堂、後座に經明閣があり、両側の廂房が寢舎と書庫になっている。書院の名は、白鹿洞東方の名勝玉屏山の名岩『飛

鯨石』から取った。

杉の木立にかくれてみえにくいのが、經明閣のさらに上に、一座の建物があった。扉のうえの木片に、大門の額とおなじ筆跡の字が、

望潮山房

と読める。

蝴蝶瓦の屋根のはしがそりあがった、伝統的な中国風の建物だが、内部は思いきって洋風をとりいれていた。

その山房の一室に、金順記の店主連維材と番頭の温翰がいた。

四隅を蓮花模様で囲まれた玻璃窓をあけて、連維材は望遠鏡でそとをのぞいていた。

レンズは、門前で轎の簾をあげて邸を見上げた男の、憎悪に満ちた顔をうつした。

「金豊茂の主人が、門のまえで唾を吐いたところだ」

連維材はふりかえって、番頭の温翰にむかって言った。

「望遠鏡を拝借」

と、温翰は手を出した。

「あの男、もう簾をおろしたよ」

「いや、私は海を見ますのじゃ」

温翰は受取った望遠鏡を、海にむけた。

この山房からは、海がよくみえた。望潮山房と名づけたのは、そのためである。

東に金門、西に鼓浪嶼、南に大胆、青嶼、梧嶼の島々を見はるかす、平和な景観である。連維材も手をかざした。

連維材は四十三歳、濃い眉が、ひきしまった浅黒い顔を、しっかりとおさえている。うすい唇やとがった鼻が、この人物の身辺にきびしい雰囲気をもたらす。しかし、彼の瞳には、それをやわらげるおだやかな光がみえた。おそらく、本人が意識的につくり出しているのだろう。

温翰のほうは六十になったばかりだが、弁髪はすでに真っ白である。唇が厚く、眼のはそい平凡な顔立ちが、主人の連維材のように、とくにしまったという感じはない。容貌はまるで違うのだが、この二人、どことなく似通ったところがあった。——そのかもしだす、きびしさ、である。

温翰自身もそれをよく承知しているとみえて、連維材が瞳にやさしさをあらわそうとつとめているように、彼もたえず微笑を口もとにうかべていた。

「まだ来ないだろう？」
と、連維材がきいた。

「まだですな」温翰は望遠鏡を、ずっと下にむけて、「ほう、あれに金豊茂が……。ぜひたくな轎にのっている」

「好きなようにさせておけばよい」
連維材は言いすてた。

やがて二人は部屋中央に戻った。

室内の家具は、ほとんど西洋風のものであった。唐草模様

の彫刻で縁どられたクリーム色の鏡台は、フランスのもので、椅子類はイギリス製である。テーブルは、オランダの商人から贈られたものだ。

東がわの壁には、ベルシャの密画がかかっている。連維材はしばらくその絵をながめた。冠をつけた王子らしい若い男が、からだをくねらせた貴婦人によりそい、そばに三頭の鹿がたわむれている図だった。

つぎに彼はその絵に背をむけて、西がわの壁をみた。そこには、イギリス人からもらった大きな世界地図がかかっている。

「私はこの部屋に戻ると、新しい力が湧いてくる。油をそそがれた火のように、こう、燃えあがるのだ」

連維材は誰にむかってともなく、呟いた。

「そのとおりですぞ」温翰はいつくしむような眼を維材にそそいで、「あなたの前途には、世界があります。金豊茂との勝負なんぞ、とつくについておりますからな」

連維材は世界地図のそばまで行った。

清国の領域は、黄色になつてゐる。インドがあり、アメリカがあり、ヨーロッパがあった。イギリスは淡紅色だった。清国の隣の、草色で塗られたほそ長い島は日本。——彼はながいあいだ、地図をみつめた。

温翰はいつのまにか窓ぎわに戻って、望遠鏡を眼にあてていたが、ふいに声をあげた。

「や、桂華さんですよ。いま門をはいりましたぞ」

海をながめるのに飽いた温翰が、たまたま望遠鏡を下にむけたとき、ちょうど邸の門をくぐろうとする婦人のすがたをとらえたのである。

「なに、姉が？」

維材は地図から眼をはなして、問い返した。

彼は山房の裏に出て、竹籠のなかから、一羽の伝書鳩をかかえ出した。この山房には人をよせつけないことにしている。邸内の家族たちとの緊急の連絡には、鳩を使っていた。

彼は通信筒のなかに、走り書きの手紙をねじこんだ。

姉には八千両まで貸してよい。――

放たれた鳩は、勢いよく舞いあがった。はばたく羽毛が、朝日をうけて、にぶく光った。

世界地図にむかって膨らんだ夢想の世界から、彼は一挙に俗世の作業にひきずりおろされたのである。

午^ご近くになって、温翰はやっと窓のそばをはなれ、おも

むろに維材のほうへ歩みよった。老人は心内の興奮をねじ伏せて、できるだけ平静を装っている。しかし維材は、その顔をみただけで、相手の心を読みとることができた。

「あらわれたね？」と維材はたずねた。

「いよいよ、やって来ました」

かすれた声で、温翰は答えた。

――あの船が来た。

維材は窓のところへ行った。

波しずかな金門湾海面は、いっばいに陽をうけて、ギラギラしている。そのはるか彼方に、船影らしいものがみえた。望遠鏡をあてると、それが、『あの船』であることがわかった。

三本マスト。二千トンはあるだろう。まぎれもないイギリスのイースト・インディアマン型洋帆船だった。

それをみつめる維材も、興奮を懸命におさえていた。

「新しい時代が来る……」

彼はひとりごちた。

船は静止しているようにみえたが、じつはゆっくりとうごいていたのだ。船首からつき出したバウスプリット（斜^{しや}橋）を、まっすぐ厦門港にむけ、海面の光をおもむろに碎きながら。

温翰が、そっと主人のそばに寄った。

二人はかわるがわる望遠鏡をとって、のぞいた。

「上陸できるかな？」維材がまぶしそうに眼をほそめて、言った。

そのとき、裏ではばたきの音がした。

「鳩が帰ってきたようだ」

維材は裏に出て、帰った鳩の通信筒をしらべた。折り疊んだ紙きれに、妻の筆跡で、

姉さんは、内証で五千両用立ててほしいと申されましたので、その金額をお貸しする約束をしました。

と書いてある。

窓のそばに戻ると、温翰が、いかがでしたか、とたずねた。

「五千両だった」と維材は答えた。

「金豊茂の尻ぬぐいには、手を焼きますなア。それなのにあの男、あなたに助けてもらったなんて思わない。まったくのところ……」

「姉も、あの男に言わんだろう」

「やれやれ」

二人はまた港のほうをながめた。

「なんだか、さびしい気がする」

と、ふいに維材が言った。

「しようがありません」温翰は慰めるように言った。「われわれは、こんな時代に生まれあわせたのですよ」

「いずれ、時代の波は、われわれをおし流すだろう。……」

そうだ、放っておいてもいいのだ」

「ところが、あなたには、それができない。波をかきわけて行く性分ですから。あなたは、いわば船の舳先^{へきまへ}ですよ」

「舳先か……」

維材は眼をとじた。

誰もいないひろい大洋のうえを、ひとりぼっちで波を切り裂いて進む船の舳先は、いかにもさびしいものである。

3

「叩板船^{カッパンセン}が来たぞオ！ 三本マストだア、外国旗だア！」子どもたちの群が、厦門の街々を、声をかぎりにふれ歩いて行く。埃をかぶって灰色になった弁髪^{ヘンパツ}が、背中で跳ねている。汗と垢と埃で、彼らの顔は真っ黒だった。

厦門もかつては開港場として、外国貿易で賑った時代をもった。しかし乾隆二十四年（一七五九）、清国政府が対外貿易を廣州一港に限定して以来、厦門の繁栄はうしなわれた。いまでも港町である。商船は珍しいものではない。三、四百トンの近海航路の船なら、いつも何隻か港内にたむろしている。ただ千トンを超える洋帆船の入港はめったにない。

路地からきこえる黄色い声は、

「呷板船、呷板船、甲板船！」

と、いつのまに節がついて、合唱になった。

呷板船、または夾板船とは、船艙の上に板を張った船のことだが、これは『洋船』の同義語として用いられている。

子どもたちのふれまわる声に、市民たちはざわめきはじめた。娯楽や刺激のいたってすくない時代では、大衆はつねに、なにかかわった事件をもとめるものなのだ。

呷板船が堂々と港にはいってくる！

これは、廈門市民にとって、大きなニュースだった。

對外貿易を広州に奪われてから七十年以上になる。島影にかくれて、こそこそと阿片密売をする洋船はときどきあったが、おおっぴらに港内にのりこんでくるのは、前代未聞のことに属した。あきらかに天朝の禁令に違反する行為なのだ。

「呂宋船じゃねえかな？」

という声もあった。

呂宋貿易は廈門にも許されていて、スペインの大きな呷板船が来航する可能性があったのだ。もっとも、商港としてスケールの小さくなった廈門は、その呂宋船にも敬遠されている。記録によれば、呂宋船は道光三年（一八二三）に入港して以来、じつに九年のあいだ一隻もすがたをみせていない。去年、越南から一隻の呷板船がきたとき、街

じゅうが大きなわざをしたほどである。

大ぜいの野次馬が海岸にあつまった。

「呂宋船じゃないとさ」

「あの旗は、どこの国のかな？」

「オランダじゃねえか？」

「水兵にきいたが、イギリスちゅうことだぞ」

廈門の街で、まがりなりにも外国にかんする知識をもっていたのは、水師（海軍）関係の連中ぐらいであろう。

ここは明代に中左所（海軍鎮守府）のおかれた土地で、海軍には縁がふかい。清朝も水師提督を廈門に駐在させている。

ときの水師提督として、福建海城諸宮の兵船約三百艘、兵約二万余を指揮していたのは、猛将陳化成であった。

陳提督は望楼にのぼり、禁令を犯しつつあるその不逞洋船をにらんでいた。

「あん畜生！」高級軍官らしからぬことを吐いて、彼は望遠鏡を眼からはずした。「本気で港にはいつてきやがる」

ついでに身をのりだして、唾を吐いた。風がつよく、唾は水平に横にとばされた。

「イギリス野郎め！」

提督はいまにしげに毒づいた。

怒っているのかと思うと、頬でニヤリと笑っている。

陳化成、号は蓮峯。『清史列伝陳化成伝』によれば、一

水兵として軍に身を投じ、二十三歳で下士官の『額外外委』に抜補され、二十八歳でやっと尉官に相当する『把總』になった。大器晩成である。

海賊退治と海上巡邏にあげられた五十八歳の顔は、真っ黒に日やけして、なめした革のようである。皺多く、かつ深い。瘦せこけて背が低く、風采のあがらぬことおびたらしい。

もともと孤門微賤の出身だから、言動に長袖者流の風雅に欠けるのは当然であろう。最高の軍職である提督に任命されて二年目だが、いっこうに大官らしさがない。

十年後の阿片戦争で、彼は江南提督としてイギリス艦隊と戦い、呉淞で壮烈な戦死をとげた。朝廷は『忠愍』と諡を賜ったし、詩人たちは彼のために、さまざまな讃歌をつくった。

林直の『壮懷堂詩初稿』に、『陳將軍歌』という詩がある。そのなかに、

生来、自ら具う封侯の相

の句がある。

これは殉節の提督を美化しすぎたきらいがある。陳化成の実際の風貌は、封侯の相どころか、海浜の老漁夫もいところだった。

「なめた真似をしやがる。兵船をくり出して、あいつを包囲しろ！」

野人提督は大声で命令を下した。

そばで一人の文官が、望遠鏡をのぞきながら、一字ずつ、船名のローマ字を毛筆で写していた。

「どうだ、お尻の横文字は読めたかね？」

と提督はたずねた。

「はい」と文官は答えた。

彼の手もとの紙には、

LORD AMHERST

と書かれてあった。

「なんて名の船かね？」

羅爾・阿美士德——そんな漢字の発音で、文官は報告した。

「羅爾・阿美士德？」おうむがえしに言って、提督は大げさに首をかしげた。「きいたおぼえがあるぞ、その名は」

4

その夜、水師提督陳化成將軍の部屋から出た従卒が、廊下ですれちがった同僚と顔を見合わせて、クスリと笑った。

「大将、まだあれを着てるかい？」

と、むこうからきた水兵がたずねた。

「もう脱がなきゃいけないんだが、いま名残りを惜しんで

るところさ」

「金順記の主人も、とんだところへ来たものだ」

アマースト号来港は、陳將軍にとつて、正式軍装を身につける絶好の口実となった。

この提督は、ひどく子どもっぽいところがある。時代おくれの甲冑を着たくてしかたがないのだ。

正式軍装をつける機会は、最近では年に一度しかない。

『秋季大閱』という閱兵式のときだけなのだ。このごろでは秋季大閱でも、道中は兜や鎧を召使のかつぐ輿にのせ、自分は軽装するというのが流行している。そんな横着な傾向を、彼はにがにがしく思っていた。

水兵時代、海賊蔡牽との戦いで、乗艦が賊砲に撃たれて沈没したことがある。もはやこれまでと覚悟をきめたとき、彼のまぶたにうかんだのは、上官が閱兵式のとき頭にいただいている兜だった。

「ああ、いちどでいいから、あんなのをかぶりたかった」
彼は水のなかで、そう思った。

彼が頭にえがいたその下級將校の兜は、ずんべらぼうのやつである。

いま彼は累進して水師提督となった。

提督の兜は、天辺に鵬の羽毛を立て、兜の表面には金色燦然たる花と雲と竜がつき、まわりに貂の尾を垂れ、十二の纓をもつ。一級下の『総兵』の兜になると、鵬の羽毛は

許されず、類の尻尾をつけた。そして雲竜も金ではなく、銀しか使えない。鎧にしても、軍制によれば、提督は護肩（肩あて）と軍衣の接するところに、金竜をちりばめるが、『副將』以下になると銀竜である。

海上を漂流していた瀕死の彼が夢みた以上の軍装を、いま彼は身につけることができる。それなのに、年に一度とは。――

「英船、禁を犯して来たる！」

これは甲冑をつけるチャンスである。

陳將軍は、その窮屈な正式軍装に身をかためていた。

清軍は乾隆時代までは、甲冑を常用したが、嘉慶以後、つまり十九世紀にはいつてからは、それはたんなる儀仗服となった。戦争様式が変化したのだ。むかしは軍衣の裏に鋼鉄や貝殻をつなぎあわせ、刀剣矢弾を防いだが、礼服化されてからはそれものぞかれた。軍衣表面も水玉模様のように『銅星』をちりばめて防禦用としたのが、いまは刺繡によって代用されている。

こんなふうに装飾化され、かなり墮落した甲冑だが、それでもみごとなものだ。

それを着用に及んで、彼は上機嫌だった。

遠くからながめていた下士官や水兵たちが、ひそひそと囁きあう。――

「あれで、イギリス船と戦争するつもりかい？」